



●1969 (昭和44) 年11月 7日
 ホンダN360やスズキ・フロンテ360といった後発の高性能な軽自動車に押されて、地味な印象となっていたダイハツ・フェロー。渋いグリーンメタリックに塗られたモデルと地味めのカップルを組み合わせた構図は、クルマの性格を象徴しているようだ。

●1970 (昭和45) 年 1月 1日
 1970年の元日に掲載されたトヨタの企業広告。初代マークIIハードトップの周囲には、トヨタ・トレーニング・センターのサービススタッフ。海外へ輸出するにあたって、サービス教育もしっかり行なったというわけだが、その主張が事実にあつたことを以後の歴史が証明している。



●1970 (昭和45) 年 1月 1日
 1970年の元日に掲載された日産の企業広告。ベビーシートに座らせた双子の赤ん坊の姿をフィーチャーし、安全性への配慮を訴えている。ストレートに「安全設計」ではなく「愛情設計」としたところがコピーの肝か。クルマはモデル末期を迎えた130セドリック。



●1969 (昭和44) 年11月23日
 俳優の山村聰をイメージキャラクターに迎えた3代目MS50系クラウンのシリーズ広告。制服の船子のマークから、かつてもっともメジャーなエアラインだったパンナム (パン・アメリカン航空) の客室乗務員とわかるミス・ジュデーに、自分のクラウンを紹介するという設定である。

クルマの広告を見れば時代がわかる 中島啓雄 3

ダットサン・ブルーバード510 DATSUN BLUEBIRD 510	6
トヨペット・コロナ TOYOPET CORONA	11
トヨタ・クラウン TOYOTA CROWN	16
日産セドリック NISSAN CEDRIC	21
ダイハツ・フェロー DAIHATSU FELLOW	26
スズキ・フロントエ SUZUKI FRONTE	31
トヨタ・カローラノスプリンター TOYOTA COROLLA/SPRINTER	36
ダットサン・サニー DATSUN SUNNY	41
マツダ・ルーチェノカプラ MAZDA LUCE/CAPELLA	46
マツダ・ファミリア・ロータリー MAZDA FAMILIA ROTARY	51
トヨタ・パブリカノスターレット TOYOTA PUBLICA/STARLET	56
ホンダ1300ノシビック HONDA 1300/CIVIC	61
トヨタ・セリカノカリナ TOYOTA CELICA/CARINA	66
日産スカイライン NISSAN SKYLINE	71
日産ローレル NISSAN LAUREL	76
スバル1000ノレオーネ SUBARU 1000~LEONE	81
いすゞベルレット ISUZU BELLETT	86
スバル360ノR2ノレックス SUBARU 360/R2/REX	91
三菱ミニカ MITSUBISHI MINICA	96
日産チェリー NISSAN CHERRY	101
三菱コルト MITSUBISHI COLT	106
いすゞフロリアンノクーペ ISUZU FLORIAN/117COUPE	111
商用車 Commercial Vehicles	116
その他のモデル【一九六〇年代編】 Other models of the 1960s	124
その他のモデル【一九七〇年代編】 Other models of the 1970s	129
国際レースノラリー International racing & rallying	134

自動車広告収集はほろこがい思い出。 沼尻 新 139

クルマの新聞広告は私の人生。 上鶴瀬孝志 140

あじがね 142

ダットサン・ブルーバード510

一九六七年に登場した、型式名510と三代目ブルーバードは量産小型車としては国際レベルで見ても進歩的なモデルであり日本車史上に語り継がれる傑作車である

■オースチンの影からの「脱却」

ブルーバード史上における最高傑作であり、また国産乗用車の技術水準を一気に国際レベルに引き上げたエポックメイキングなモデルとして後世に語り継がれる存在、それが510である。

ブルーバードが誕生したのは一九五九年。戦前からの「ダットサン」の伝統と、オースチンA50の国産化を通じて学んだ技術の融合から生まれた初代310は、発売と同時にヒット。国産小型乗用車のスタンダードを築いた。

その後を受けて六三年に登場した二代目410は、ピニンファリーナが手がけたイタリアンスタイルが「尻下がり」と呼ばれ不評を買い、六五年には310の誕生以来独占していたベストセラーの座を、宿敵コロナに奪われてしまった。

「BC戦争」と呼ばれた、コロナとの熾烈な販売合戦を制して国内販売一位の座を奪還し、そして海外市場でのさらなる飛躍を実現する使命を帯びて、六七年八月に510はデビューしたのだった。

三角窓を取り去った、「スーパーニックライン」と呼ばれる直線的でシャープなボディをまとい、まさに社運を懸けて登場した51

0に、先代の面影はまったくなかった。中身のほうも「ネジ一本まで新しい」と言われたように、410をはじめとする既存の日産車からの流用部品は皆無に近かったという。ゼロから開発されたその成り立ちは、量産小型車としては、世界レベルで見てもきわめて進歩的かつ高級なものだったのだ。

先代410、そして最大のライバルであるコロナを筆頭として、3ベアリングのOHVエンジンにリーフリジッドのリアサスペンションが大勢を占めていた時代に、510は5ベアリングのSOHCエンジンと、BMWに範を取ったであろう前マクファソン・ストラット、後セミトレーリングアームの4輪独立懸架を備えていた。

「技術の日産」の総力を結集して生まれた510は、日産がオースチンの影響から卒業し、独自の道を歩み始めたマイルストーンでもあったのだ。

■コロナからベストセラーの座を奪回

「新しい時代の新しいセダン」というキャッチフレーズを掲げた510は、目論見どおり市場でも好評を博し、一九六八年初頭にはモ

デルイヤーの末期に入ったコロナからベストセラーの座を奪い返した。対するコロナは同年初、フルモデルチェンジの噂をよそに上級車種のコロナ・マークIIを発売、より豪華なムードと豊富なバリエーションを武器に再び攻勢をかけてきた。

スポーティモデルの1600SSSを除き1300のみだった510も、1600シングルキャブエンジン搭載車や2ドアクーペを追加してこれに対抗。技術や性能面では見劣りしても、マーケティング戦略では進んでいたコロナ・チームを相手に激戦が続いたのだった。

■海外における高い評価

世界を相手に日本車の実力を知らしめたという点では、510は間違いなくパイオニアだった。その原動力となったのが、サファリラリーにおける活躍である。

一九六八年から参戦した510は、二年目の六九年には総合三位とチーム優勝を獲得。サファリが世界ラリー選手権に組み入れられ、欧州からもワークスチームが本格的に参戦を始めた七〇年には、ついに総合優勝を果たした。六三年に310で挑戦を開始してから九年目にしての悲願達成は、510の性能と耐久性を大いに世界にアピールした。

いっぽう主要な輸出先だったアメリカでは、サーキットでも好成績を取めた。生来の実力に加えモータースポーツにおける活躍にも後押しされた「ファイブ・テン（510）」は、北米でも五〇万台以上を売るヒットとなったのだった。

だが510が成功作であり、傑作と呼ばれたゆえに、後継車づくりは難航した。その後何度か510を彷彿させるモデルを投入したことからもわかるように、日産自身が長らく510の影に悩まされることになるのだった。

●1967(昭和42)年8月12日

22日目の終戦記念日となる1967年8月15日に発売された510。これはその3日前の全国紙に掲載された広告。戦後の日産車のお手本となったオースチン、あるいは410ブルや130セドリックのピニンファリーナ調の面影を払拭した、「新しい時代の新しいセダン」というコピーにふさわしい自信に溢れたモデルであり、そのことが広告からもうかがえる。





●1969 (昭和44) 年 2 月

「Dynamic Bluebird」というキャッチコピーを継続して使いつつ、クーペをメインに据えて、「男のクルマ」というイメージを前面に打ち出したシリーズ広告。同時期にオンエアされていた、やはり「男のクルマ」を強調したドラマ仕立てのテレビCMも印象的だった。



●1969 (昭和44) 年 1 月 13 日

1968年11月に遅ればせながら加えられた2ドアクーペの広告。ライバルのコロナがセンターピラーのないハードトップだったのに対して、510のそれはオーソドックスなノッチバッククーペだった。走りか自慢の硬派なクルマらしい選択だが、当時は2ドアセダンとあまり代わり映えせず、地味に見えたのも事実である。

●1969 (昭和44) 年 4 月 2 日

これも「男のクルマ」シリーズ。フリンジ付きのスウェードのジャケットにテンガロンハット、これでギターをかついだら小林旭……というのは冗談だが、当時の日産はこうしたワイルドなムードが好きだったようで、サニークーペでも似た感じの広告を展開していた。



●1967 (昭和42) 年 8 月 16 日

発売初日の広告。写真と同じ角度から見た詳細な透視図を用い、SOHCエンジンや4輪独立懸架をはじめとする自慢のメカニズムを紹介している。



●1968 (昭和43) 年 8 月 16 日

「Dynamic Bluebird」というキャッチフレーズを掲げたシリーズ広告。デビューから約1年後に掲載されたこの広告では、510シリーズのイメージリーダーたる1600SSをフィーチャーしている。同年10月にはシングルキャブの1600エンジンを積んだモデルを「ダイナミック・シリーズ」の名で追加している。

